

2019年度事業報告（案）

（2019年1月1日～12月31日）

法人名称 NPO 法人 教育支援グループ Ed.ベンチャー

1. 事業成果

2019年、世界では大国を中心とした利害関係の衝突が激しさを増し、大国の指導者は自国の民のすべてに責任をもつ指導者というよりは、自分を権力者の位置に押し上げる支持者のみに利益誘導を謀っているように見えます。私たちは指導者に国や世界の未来の可能性をみることに、そのことに困難さを感じます。しかしながら、他方で、香港の民主化運動に関わり、自国民に武器を向ける警察に抵抗する若い学生たち、15歳でたった一人「気候変動のための学校ストライキ」を始め、その影響を世界にまで広げた環境活動家のグレタ・トゥーンベリさんなど、若い世代が、自分たちの未来の可能性のために、自らの行動で歴史を変えようとする姿から、先行世代の無責任さを問われたようで、自責の念をもたざるをえないという経験をしたことも、2019年を表す一つの姿であるように思います。

さて、こうした世界・社会状況のもとで、私たちNPOは「競争的でない、多様性を認め、持続可能な社会の構築」という理念に向けて、何ができたのでしょうか。

成果としての第1は、「学習とともに、実践への展開を模索する」に関して、外国人児童生徒への対応について、具体的な事例をもとに検討する学習会が立ち上がりました。これにより、一つの事例の背後にある複雑な状況を読み解く技法を身につけることで、実践を変える可能性が模索されました。

第2は、「課題を整理する中で、継続的な取り組みを模索する」に関して、まず、委託を辞退したフレンドスター教室について、子どもたちのニーズにそって「スペイン語教室」の継続ができたことがあります。最も心配だった子どもたちが、そこで楽しく学びつつ、新しい学習教室との関係も継続していく姿に、「見守る」ことの重要性をはっきりとつかむことができたと感じます。次に、エステレージャハッピー教室において、子どもたちのモデルとなる高校生世代の育成が、母国語教室の開催や支援スタッフとしての雇用など、紆余曲折ありながらも継続できました。

他方、ほぼ若手世代に移行された学校支援事業を中心とする活動は、なかなか発展的な展開を見せるに至りませんでした。また、昨年度模索的に始まった他団体や組織との協力関係も、発展的な展開に至りませんでした。その主な原因は、スタッフ不足、ボランティア不足、さらには、組織を越えて社会的な理念を検討する機会の不足です。その背景には、社会的な活動よりも仕事や家庭の優先という事情があります。日本という社会は、戦後の経済発展の中で、仕事か/家族かという二項対立の中で人生設計や生活を捉え、そこで幸せであることを第一義として制度設計が行われてきたために、「利他的であること」から距離をおくことを是とするムードが社会の基底にあるのかもしれませんが。仕事でもない、家庭でもない、第3の場所の発見、そうした場所にNPOのような活動が位置づけられると、香港の民主化やグレタさんを生み出すような社会的磁場が日本社会にも生み出されるようになるのかもしれませんが。

2. 事業内容

学校支援事業 ①理論学習会

【2019年事業目標】

貧困をテーマに学習を進めていく中で見えてきたことは、その中にいる子どもや家族は、人や制度、機関とのつながりにくさを持つということだった。

今年度も「教育と貧困、弱者」というテーマを継続し、学校で出会う子どもたちや親が抱える大変さの背景、学校を取り巻く世の中の現状を知ったとき、どのように子どもに関わり寄り添うべきか、教育現場の課題をとらえる重要な視点の一つとして貧困と教育の関係性について整理していく。現場の課題を捉えつつ、10年後の子どもたちの姿を想像し、実践につなげる力をつけたいと考える。

【事業総括】

本年度も「貧困と教育」をテーマに学習会を展開した。昨年度までの学習会で、貧困の中にいる子どもや家庭は人や制度、機関との「つながり」を持つことが難しいということがわかった。これまでは子どもへの支援に焦点をあてていたが、その課題は家庭の中の「大変さ」でもあった。その背景から、家庭を支える方法としてどのような可能性があるのか、また、学校でその機関と家庭をつなげるための知識を教員が持つことが必要なのではないかという視点から、学習会の内容をこれまでの知識と合わせ、より視野を広げる内容を設定した。4年間にわたり「貧困と教育」をテーマにしてきたが、今年度は理論としての「貧困」を捉える学習会とともに、「つながり」を意識した子ども達同士の関わり合いをつくる実践報告の形式で学習会を行った。

教育現場の今を見据える力を養うことは重要であると考え、前半の学習会では、大学講師を招いての学級集団を構造的に捉えるための学習会、授業研究会との共同開催で行った小・中学校での子どもたちの「つながり」を意識した授業の実践報告会、産休・育休・働くママパパのための学習会と共同開催したスクールソーシャルワーカーを講師に招いた学習会を開催した。目の前にいる子どもたちやその家庭に対し、教育現場からできる支援を知ることができた。これらの学習会で見えてきたことは、教員が声にならない子どもたちの声を聞こうとすることだった。そして、教員ができることは、排除される、取りこぼされようとする子どもたちが、学校の中で「人とのつながり」をつくることということだった。

後半の学習会では、若者の奨学金問題を支援する弁護士の活動や、国の制度である社会保障にその枠を広げ、「制度や機関とつなげる」知識をつけるための内容を展開した。昨年度は生活保護に焦点を当てた学習会を設定したが、今年度は生活保護に限定しない社会保障制度について知ることや、奨学金についても取り上げた。貧困の中にいる子どもたちには「学費」も大きな壁となる。義務教育を終え、社会に出ていく子どもたちに、貧困に立ち向かう力の育成、支援の手を持つための「つながり」をつくることが貧困の連鎖を断ち切る術のひとつであることも学ぶことができた。

今年度の学習会を進めていく中で、私たち教員がつけた知識を教育現場でどのように実践していけるのかという課題も見えた。実践していくためには、社会保障・生活保護・

奨学金制度の問題など社会の今を捉え続け、子どもが貧困に立ち向かうためにつける力を考えていく必要がある。また、子どもやその家庭に寄り添いながら制度や機関と「つながり」をつくることもそのひとつであるということがわかった。	
事業担当者(理事●)	●馬場有希 ○根岸知世
内容・日時・場所・参加者数	<p>原則第一月曜日 19:00～21:00 全7回</p> <p>4月22日(月) 講演「学級づくりの基本 ～教室での教師と子どもの関係～」 講師：清水 睦美氏（日本女子大学 教授） 場所：大和市シリウス 603 中会議室</p> <p>5月13日(月) 理論学習会主催（授業研究会との共同開催） 授業実践報告会「クラスづくりと国語の授業」 実践報告：山崎 正氏（小学校教諭） 飯田 里沙氏（中学校教諭） 場所：大和市シリウス 603 中会議室</p> <p>6月23日(日) 理論学習会主催 （ママパパのための学習会との共同開催） 講演「SSWの視点から考える学びの環境づくり ～組織的な取り組みの可能性～」 講師：上原 樹氏（大和市青少年相談室 SSW） 場所：大和市シリウス 612 文化創造室・会議室</p> <p>7月1日(月) 実践報告「題材から授業をつくる」 （授業研究会との共同開催） 授業実践報告：馬場有希氏（小学校教諭） 場所：大和市シリウス 608 和室</p> <p>9月2日(月) 文献講読会 テーマ：『性の多様性を考える』 場所：大和市シリウス 603 中会議室</p> <p>10月7日(月) 講演「奨学金問題からみえる子どもたちの学びの現状」 講師：田原 恵氏（神奈川県弁護士会 弁護士） 場所：大和市シリウス 603 中会議室</p> <p>11月11日(月) 講演「生活保護から社会保障制度を考える ～今とこれからをどう生きるか～」 講師：今井 伸氏（十文字学園女子大学 人間生活学部人間福祉学科 教授） 場所：大和市シリウス 603 中会議室 (のべ参加者数 61名)</p> <p>※ 7月参加人数は授業研究会で算出</p>
収入金額	23,500円（参加費）

支出金額	53,192 円（賃借料 8,250 円、諸謝金 44,548 円、印刷製本費 200 円、消耗品費 194 円）
------	---

学校支援事業 ②授業研究会

【2019年事業目標】

かかわりあいの中で一人一人の思考が見える授業をめざす。

【事業総括】

今年度は、子どもたちが授業の中で知識を得るだけでなく、自分の考えをもち「思考する」とはどのようなことかを追求するために研究を行った。そして、「思考」というものが他者との関わりの中で深められるのではないかと考え上記目標を設定した。そこで前半は、授業の中で子どもたち同士の関わり合いを取り入れながら「思考させる」ことを意識した授業実践を行っている小学校・中学校教諭から手法や考え方について学んだ。

中学校教諭による国語の実践からは、教材の工夫について学んだ。苦手意識を持っている子どもでも興味を持てる教材を発掘することで学習意欲を引き出すことができることがわかった。小学校教諭からは、外国にルーツがある児童と他の児童とのつながりを意識した学級経営について学んだ。教師による言葉がけなどの仕掛けが子ども同士の関係作りを行う一助となることが分かった。学級会の実践からは、子どもが主体的に活動できる手立てについて学んだ。子どもが主体となって考えることで、自身で学級を運営する意識を持たせることができることが分かった。中学校教師による数学の実践からは、課題をもとに子どもたち同士で意見交換をしながら解決していく方法を学んだ。子どもたちの課題解決能力を信じ、子ども同士が教え合うことで、学習を通して互いを知る機会が生まれることが分かった。

後半は、学んだことを生かし「道徳」授業を行った。道徳は昨年度から教科化され、評価も必要とされている。授業検討を通して、題材の選び方に難しさを感じた。教科書の中には児童の実体験や経験からは意見を言いにくいものもある。今回そういった題材を選んだことによって意見を引き出すために様々な知識を伝える時間が必要になり、結果として子どもたちによって互いの意見を深められるような場面を十分に作り出すことができなかつたように感じた。

子どもたちが社会の中にある課題に対して思考したり、自分事と捉えたりする力をつけるために、関わり合いを取り入れた授業を目指し、前半と後半の研究に取り組んだ。しかし、学習会の回を追うごとに、私たち自身関わり合いの方法や環境づくりの方法論に意識が偏ってしまったことや、子どもたちにつけたい力について十分な議論ができなかつたことが原因で、結果として授業実践では表面的な意見交換の場を設定しただけの授業になってしまった。

今年度は、目標に沿った研究に至ることができなかつたが、子どもたちにどのような力をつけることが大切なのか、そのためにはどのような環境設定、発問、教材が考えられるのか、十分に検討していく必要があると考える。

事業担当者（理事●） ●下新原なつみ ○三澤律子

内容・日時・場所・参加者数	<p>原則第三火曜日 19:00～21:00 全8回</p> <p>5月13日(月)「クラスづくりと国語」実践報告 (理論学習会との共同開催)</p> <p>6月18日(火)「学級会」実践報告/授業案検討 講師:内藤順子氏(元小学校教諭) 場所:大和市シリウス603</p> <p>7月1日(月)「題材から授業をつくる」実践報告/授業案検討 (理論学習会との共同開催)</p> <p>8月27日(火)『学びあい』の考え方をもとにした授業 実践報告 講師:加藤綾氏(中学校教諭) 場所:大和市シリウス605</p> <p>9月17日(火) 小学校「道徳」授業案検討 場所:大和市シリウス605</p> <p>10月10日(木) 授業実践 授業者:三澤律子(小学校教諭) 場所:大和市立福田小学校</p> <p>11月19日(火) 授業実践報告 場所:大和市シリウス606</p> <p>12月10日(火) 意見交換会 「かかわり合いのなかで思考が見える授業とは」 場所:大和市シリウス605</p> <p>(のべ参加者数27名) ※5月参加人数は授業研究会で算出</p>
収入金額	14,000円(参加費)
支出金額	4,400円(賃借料4,400円)

学校支援事業 ③スタディツアー

【2019年事業目標】

今日的な教育課題や社会状況の現場を実際に訪れることで、日常の課題を広い視野から考えることができるようにする。

【事業総括】

2019年度は、平塚市にある県立子ども自立生活支援センター「きらり」を訪問した。「きらり」は、昨年度訪問した自立援助ホーム「みずきの家」と同様に、社会的養護の施設である。訪問に向けての事前学習では、県央教育事務所のスクールソーシャルワーカーである伊藤洋子氏を講師に迎え、「学校と関係機関のつながり」というテーマで学習会を行った。関係機関である児童養護施設など、様々な社会的養護の施設について、その違いなどについて説明していただいた。「きらり」は、乳児院、福祉型障害児入所施設、児童心理治療施設の3つの社会的養護の施設が一体となった複合施設である。訪問では、併

設する金目小・中学校五領ヶ台分校についても説明と校内を案内していただいた。

今回、訪問を終えて私たちが考え続けるべきことは、次の2点である。1点目は、「福祉」と「教育」の連携について。「きらり」が設立された背景には、児童虐待相談件数の増加、障がいを持った子どもたちとその家族へのケアの必要性の高まりなどがある。家族が抱える課題を、家族の中だけで解決するのではなく、「福祉」が解決すべきと社会全体が捉えた動きと言える。しかし、その家族のニーズを「福祉」だけでは、拾いきれていない状況がある。子どもや家族の状況に関する情報を持っているのは、学校や私たちEd.ベンチャーのような「教育」に関わるものである。様々な背景がある子どもたちや家族を適切に支援するためにも、「教育」と「福祉」がより密接に連携していくことが必要である。「教育」が持っている情報を「福祉」につなげたり、「きらり」などの「福祉」が何ができるのか、その役割や違いについての知識を「教育」側が持っていなければならない。

2点目は、私たちの、「家族」に対する見方についてである。「きらり」では、子どもたちが家族と離れ生活することで、子どもや家族を支えている。子どもに関わる課題を、その家族だけが担うのではなく、社会全体で子どもたちを育てるという方向に、私たちの認識をシフトしていかなければならないと感じた。

事業担当者(理事●)	●池田喬
内容・日時・場所・参加者数	事前学習会 7月29日(月) 19:00~21:00 大和市シリウス 603 中会議室 スタディツアー 8月9日(金) 10:00~12:00 県立子ども自立センター「きらり」 (のべ参加者数 11名)
収入金額	4,000円(参加費)
支出金額	1,000円(賃借料 1,000円)

学校支援事業 ④産休・育休・働くママパパのための学習会

【2019年事業目標】

- ・教育に関する問題を考える機会、育児や復帰への不安を取り除く情報提供の2つを目標とする。
- ・社会から孤立しやすい育児中の母親や父親が、人や社会とのつながりをつくることのできる場にする。

【事業総括】

今年度4年目を迎えた本事業では、昨年度までの経験を踏まえて、年間を通して学習したい内容が定着しつつある。今年度は「支援教育」「学びの環境づくり」「学級づくり」「育児に関する休暇・休業制度」「地域・社会・学校の連携」の5つの学習会を行った。どのテーマにおいても、子育て中の教員と一緒に学習したいと感じる内容で、一年間の学習会が充実したものになった。また、積極的に講師を呼ぶことで、参加者は専門的な話を聞くことができ、質疑や意見交流の時間を通して、さらに学習を深めることができた。

4月と6月は、昨年度に引き続き、他事業(理論学習会や特別支援教育のための学習

会)との共同開催を行った。子育て中の方が来やすいように、日曜日開催に設定して、子ども連れでも参加できるようキッズコーナーを設置し、保育アルバイトを手配した。育休明けに初めて特別支援級の担任として復帰する教員が多いため、「特別支援教育の基礎講座」では、改めて支援教育について学べる貴重な機会となった。

9月の学習会では、今年は実際に講師に来ていただき、より専門的な話を聞き、学習を深めることができた。理論学習会で4月に聞けなかった先生方にも参加を呼びかけ、学級の“集団”を捉え直し、学級づくりについて考えを深める時間となった。

10月には事務職員の方をお呼びして、「休暇・休業制度」について学習した。制度の歴史からは、時代と共に働く環境が整えられてきていることを知る一方で、実際に利用するためには、職場での理解や協力が不十分であるなど、まだ課題も多いことが分かった。

11月には「地域・社会・学校が連携して子どもを育てること」をテーマに学習した。仕事や子育てに苦しむ“お母さん支援”が“子ども支援”につながるが、保育制度を整えるだけでは不十分であり、食事支援や母親が集まる場づくり、家庭への訪問支援など、様々な面からアプローチしていくことが必要だと分かった。また、地域によっては学校が閉鎖的な所も多く、もっと地域へ要望を発信して協力を得られるとよいという意見があった。今後、地域全体で子どもを見守る環境を整えていくために、私たちに何ができるか考える機会となった。

今年度は、学習会を日曜日開催に設定して、土曜日に多いと思われる子どもの通院や習い事などの用事と学習会の日程が重ならないように配慮した。また、チラシには年間の予定を載せて、見通しがもてるようなレイアウトにすることで、忙しい子育て中の教員でも、都合をつけて学習会に参加しやすくなるように工夫した。

少しずつ形を変えながら、今年度も、子どもと一緒に安心して学習できる場づくりを進めることができた。

事業担当者(理事●)	●清水美希 ○下新原なつみ
内容・日時・場所・参加者数	<p>4月21日(日)10:00~12:00 学習会(特別支援教育のための学習会と合同開催)</p> <p>6月23日(日)10:00~12:00 学習会(理論学習会と合同開催)</p> <p>9月8日(日)10:00~12:00 学習会「学級づくりの基本～教室での教師と子どもの関係～」 講師：清水 睦美氏(日本女子大学 教授) 場所：大和市シリウス 612</p> <p>10月27日(日)14:00~15:30 学習会「育児に関する休暇・休業制度について」 講師：鈴木 広美氏、見上 恵氏(大和市小学校 事務職員) 場所：大和市シリウス 608</p> <p>11月24日(日)9:30~11:00 座談会「地域・社会・学校 つながりから見える可能性」 講師：水嶋 淳氏(神奈川県教育委員会教育局県央教育事務所所長)、</p>

	館合 みち子氏 (NPO 法人しんちゃんハウス 理事長) 場所：大和市シリウス 603 (のべ参加者数 31名)
収入金額	8,000 円 (参加費)
支出金額	26,247 円 (賃借料 3,750 円、諸謝金 11,137 円、通信運搬費 3,360 円、消耗品費 8,000 円)

学校支援事業 ⑤外国人の子ども理解のための学習会

【2019 年事業目標】学習ボランティア希望者や、学校教員が「大和市の外国人児童、生徒」が抱える問題の理解を深められるような学習会を企画運営する。

【事業総括】

大和市には、数多くの外国にルーツをもつ子どもたちが暮らしている。しかし、来日経緯や家庭の状況、普段子ども達がおかれている環境を知る機会が極めて少ない。そこで、学習ボランティア希望者や、学校教員を対象に3月に1日、8月に2日間、外国人の子ども達が置かれている状況や課題を理解し、様々な教育現場での学習支援に役立てていくために、学習会を開催した。

4月に国際教室担当の方を中心に国際教室担当マニュアルを使用した学習会を行った。国際教室を担当する先生方にとって細かい手立てを学ぶ良い機会となった。

今年度の学習会は、小・中学校やその国際教室にいるであろうルーツをもつ子どもたちに焦点を当てた内容となった。それらの内容を研究者、大和市内の外国につながるのある児童生徒に関する調査を行なった教員、外国につながるのある児童の支援を実際に行なっている大和市の事業団体の方などが学習の講師となり、多方面から理解できるようにした。ペルー系の家族についてや来日経緯の研究者が講師となり、出身国の違いによる子どもの抱える課題についてより具体的な事例を学ぶ機会となった。

参加者も教員が多くなり、実際に現場で目の前にいる外国につながるのある子どもたちへのどのような支援や働きかけをしたらよいか悩んでいる方々がいることがディスカッション等からわかった。そして、普段学校現場で学ぶことができない内容も多かったと感じる方がいた。参加者にとって改めて現場に戻ったときに学んだことを活用できるということだけでなく、ルーツを持つ子どもたちと向き合う原動力や資源となった。

事業担当者(理事●)	●前田拓郎 ●西岡歩
内容・日時・場所・参加者数	3月28日(木) 集中講座 大和市シリウス 612 ① 外国人の子どもの生きにくさ 講師：清水睦美氏 (日本女子大学 教授) ② 外国人労働の実態 講師：鈴木江理子氏 (国士舘大学 教授) ③ 講師を交えてのフリーディスカッション ④ 参加者で行うグループディスカッション 4月25日(木) 国際教室担当マニュアルの学習会 大和市シリウス 609

	<p>8月21日(水)22日(木)集中講座 大和市渋谷学習センター309</p> <p>① 外国人の子どもの生きにくさ 講師：清水睦美氏(日本女子大学教授)</p> <p>② ルーツ別の子どもたちの抱える課題の違い 講師：清水睦美氏(日本女子大学教授)</p> <p>③ ルーツを深く知る(ペルー系の家族について) 講師：角替弘規氏(静岡県立大学教授)</p> <p>④ 学校現場から見えてくる外国人支援のあり方について 講師：前田拓郎氏(小学校教諭)</p> <p>⑤ 外国にルーツをもつ子どもの言語獲得 講師：清水睦美氏(日本女子大学教授)</p> <p>⑥ 大和市外国人支援事業から見えてくる外国人支援のあり方について 講師：篠原弘美氏(大和市プレクラス 日本語指導巡回教員) (のべ参加者数 36名)</p>
収入金額	17,500円(参加費)
支出金額	73,146円(賃借料12,200円、諸謝金44,548円、印刷製本費3,560円、通信運搬費4,838円、消耗品費8,000円)

学校支援事業 ⑥特別支援教育のための学習会

【2019年事業目標】

障がい者社会モデルの視点でとらえ、「特別支援教育」の在り方への理解を深める。

【事業総括】

事業開始3年目となった本年度、目標に沿って、小中の学校現場だけでなく幅広い視野で「特別支援教育」を考える学習会・講演会を行った。

4月、橋本衛氏を講師に招き、大和市での支援教育の取り組みや、発達障がいの特性、障がいのある児童生徒への接し方等、特別支援教育の基礎を学んだ。

障がいの特性や知識もさることながら、児童生徒自身が何に困っているのか。また、保護者の声に耳を傾け、困り感の背景に“想像力”を働かせることが、学校と家庭が手を取り合う支援の第一歩であると感じる学習会となった。

5月は2名の講師をお迎えし、現在自身の学級に在籍する児童・生徒について座談会形式の相談会を行った。日々学校で接する児童・生徒について語る時間を多くとれたため、より具体的な支援の在り方について考え、明日からの実践につながる学習会となった。

中でも自閉症児の性について、「〇〇でなくてはいけない」と考えてしまう自閉症の特性と、「男らしさ・女らしさ」というジェンダーの視点により悩む児童の事例が紹介された。「特別支援学校(の子供たち)では、性的な興味による問題はあるものの、男女の区別は薄くその人個人としての付き合い方ができている」との講師の助言が興味深く、“男女”という枠組みではなく、“個性ある一人”としてのとらえ方が社会には必要であるという

示唆を含んでいるように感じられた。

6月、「学校文化の包摂と排除」というテーマで、「インクルーシブ教育の基礎基本を肌感覚で学ぶ」学習会を行うことができた。2歳から全盲だという講師の二羽氏の学校や教師との関係に関わるリアルな経験は、当事者にしか語ることのできないものであった。障がいの有無にかかわらず、子どもにとって「一緒に遊べるのが大事」という「支援」を前面に出す教育場面では忘れがちである当たり前のことを改め教えてくれた。

参加者からも「支援がすべての課題を解決するものではないと感じた。」「どの子どもも居場所がある学校」といった感想が出ており、心に響く講演となった。

8月は、大和市の障害福祉センターである松風園にある、就学前の障がいのある子どもたちが通う「児童発達支援センター」へのスタディツアーを行った。

松風園では、障がいのある子どもたちが家庭・地域での生活の質を高めることを目指している。見学の随所に見られた「子ども達の状況を的確に見極めて必要な手立てを準備し、手伝ってしまいたくなる気持ちをぐっと抑えて本人の自主的な動きを見守る。」という一貫した職員の姿勢は、「自分でできた」という子どもの自発的な強い活動の動機付けを大切にすることで、子ども自身が成長するという大切な視点を教えてくれた。

最後の学習会は11月に2名の講師を招き「特別支援教育の在り方」と題して行った。松澤氏からは、自身が支援学級に在籍している中で感じたことや、学校卒業後の就労への活動の様子を、障がいのある当事者として紹介してもらった。参加者の中には小・中学校の支援級担任もおり、現在受け持っている子どもたちにとってのひとつのモデルとなった。また、教員としての指導・支援の在り方を考え直す契機となった。

植木氏の講演では、様々な事情で小・中学校に通うことのできなかつた生徒の受け皿として誕生したみのり学園の日々の授業の紹介や、通っている生徒の実情を知る講演となった。一人ひとりのニーズに合った教育を受けることのできる場があることの大切さについて改めて考えさせられた。

特別支援教育が学校教育を越えた社会のありようと密接にかかわっていることを実感する学習会となった。

事業担当者(理事●)	●三澤律子 ●清水睦美 ●森尾宙 ○月田めぐみ
内容・日時・場所・参加者数	<p>4月21日(日) 10:00~12:00 基礎講座「学校における特別支援教育の基礎」 講師：橋本衛氏(大和市教育局 指導室) 場所：大和市シリウス612</p> <p>5月16日(木) 19:30~21:00 学習会「特別支援教育に関する相談会」 講師：木村訓子氏(特別支援学校 地域支援担当教諭) 蓮見麻衣子氏(社会福祉法人大和しらかし会 児童発達支援事業どんぐり) 場所：大和市シリウス610</p> <p>6月5日(水) 19:00~21:00 講演会「学校文化の包摂と排除」</p>

	<p>講師：二羽泰子氏（東京大学大学院教育学研究科 特任助教） 場所：大和市シリウス 610</p> <p>8月7日（水） 9:45～11:45 スタディツアー 場所：社会福祉法人大和しらかし会 大和市障害福祉センター 松風園</p> <p>11月16日（土） 13:30～15:45 講演会「特別支援教育のあり方“当事者”と“当事者を取り巻く 現状”から考える」 講師：松澤篤志氏（(株)ハピNZ） 植木真也氏（八洲学園高等学校技能教育連携施設 町田みのり高等学校教諭） 場所：桜丘学習センター104 会議室</p> <p style="text-align: right;">（のべ参加者数 43名）</p>
収入金額	17,500 円（参加費）
支出金額	25,773 円（賃借料 6,000 円、諸謝金 16,137 円、旅費交通費 3,420 円、 消耗品費 216 円）

外国人支援事業

⑦子どもの居場所・学習支援教室（エステレージャ・ハッピー教室）

<p>【2019年事業目標】</p> <p>〈小学生教室〉 教科学習支援として、宿題の他、国語・算数を中心に学年ごとの習得すべき内容の教材を用意して学習の支援を行う。就学前～低学年の子どもに対しては、日本語の語彙や日本語による体験を補うことを目的として体験的な学習ができる機会を作る。4年生以上の子どもたちについては、学習内容の理解を深めていけるよう、丁寧な説明を加えながら学習を進めていく。また学習だけではなく、家庭や学校の話の聞いたり生活を振り返ったりする機会を作っていく。その一つとして、昨年度計画したお金に関する学習を進めていく。</p> <p>〈中学生教室〉 中学生に対しても、丁寧な説明を加えながら学習を進め、学習内容の理解を深めていく。普段の学習支援の他、定期テストや高校受験支援も行い、定期テスト前にはテスト対策の学習会を、中3生には受験対策学習会を開催する。また中2生を対象とした進路学習会を計画し、早くから将来についての計画を持てるような機会を作る。</p> <p>【事業総括】 登録制、3学期制を継続して、小中学生への学習支援を行った。</p> <p>〈小学生教室〉 ・1～3年生と4～6年生の2つのグループに分けてスタッフを配置して支援を行った。</p>

宿題の支援が中心であった。宿題の多くが算数と漢字学習であり、多くの子どもが算数には積極的に取り組むが、国語には苦手意識をもって取り組んでいる様子があった。特に音読がスムーズに読めて、内容を把握している子どもは少なかった。理由として、子どもからは家で音読を聞いてもらえる人がいないことを、また保護者からは自分が音読を聞いて何が良いのかわからないということを知っており、学校で音読をする際に声に出して読んでいないのではないかとと思われることが多かった。国語の学習については、内容を把握しながら音読ができる力をつけていくことが必要であると考えている。また、漢字については意味や使い方を理解しないまま練習していると思われる場面を目にすることが多かった。外国につながる子どもにとって漢字学習は難しく面倒だと感じる学習であるため、漢字に親しみながら学習をしていけるような指導を工夫する必要があると考えている。

- ・1～4年生では、合同で算数や国語を学んだり工作をしたりといった学習形態を取り入れて学習を進めることができた。5～6年生については、宿題の支援と同時に、学校や家庭での話を聞き取りながら学習支援をした。また、生活を振り返る機会としてお金に関する学習の時間を何回か作ったが、子どもの興味を十分に引き出すことができず、生活につながる学習まで広げていくことが難しかった。子どもの生活に密接につながるテーマを見つけて学習を考えていく必要があった。
- ・高校生スタッフが企画して「遊びの時間」を作ったところ、自ら企画したいと声を上げ、呼びかけをする子どもが出てくるようになり、子どもの主体性が少し見られるようになった。今後も子どもが主体的にかかわるイベントを企画していきたい。

〈中学生教室〉

- ・小学生に比べると落ち着いて学習に取り組む様子が見られた。数学の課題を持参して取り組むことが多く、学校の課題を終わらせることで精一杯である。定期テスト前になると数学以外の教科を学習することがあるが、学習で使われる日本語は小学校よりもさらに難しく、授業を十分に理解できていないことが多い。定期テスト前にはテスト対策の学習会を行ったが、学習内容を十分に理解してテストに臨むという段階まで準備をすることは難しかった。丁寧に説明を加えながら理解を進めていくような支援をしていく必要を感じた。
- ・中3生には、冬休みに受験対策の学習会を用意し、中学校の先生の協力を得て受験勉強や面接練習などに取り組んだ。2日間という短い期間ではあるが、受験に向かう姿勢を作ることができた。1～2年生が進路について学ぶ機会を作れなかったため、早い時期から将来を考える時間を作っていきたい。

〈その他〉

- ・教室の運営では、学習の最後に振り返りの時間を作って帰りの会を行った。エステレージャや学校、家庭のことを振り返り、日直になった子どもが帰りの会の司会と自分の振り返りを発表するようにした。友達の発表を聞く姿勢をつくと同時に、自分の言葉で発表する力をつけていきたい。
- ・昨年度に引き続き、子供たちの母語の獲得、維持のために母語教室を開催した。母語話者のスタッフが指導者となって英語とスペイン語の教室を開催した。英語教室では、環境など様々なテーマを設定して学習が進められた。スペイン語教室ではスペイン語の

	<p>語彙を増やす学習が進められ、今後は語彙を増やすことから読み書きへとつなげることを目標に学習を進めていく予定である。英語、スペイン語教室ともに参加者は小学生が主であった。参加する子どもの母語に差があるため、教材や指導方法の工夫をしていくことが必要である。英語教室は毎週、スペイン語教室は月1回を予定していたが、定期的にできているとはいえないところがある。母語教室の目的と開催頻度を再確認して、定期的に母語教室が開催できるようにしていく必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> 子ども同士の関係では、子ども同士が安心して過ごせる雰囲気ができてきて、小学生同士、中学生同士、また小学生と中学生が自由に話をするが増え、子ども同士の関係が少しずつできていると感じる。関係性をさらに深めていけるようなことを今後企画していきたい。 子どもへの対応については、教室を休みがちな子どもがスタッフの送り迎えによって参加ができるようになったケースがあった。今後も子どもが教室と繋がれるような工夫をしていきたい。一方、登録を待機している子どもに対して丁寧な対応ができていなかったため、今後は、登録待機者への連絡を定期的にとりながら丁寧な対応をしていきたい。 保護者への対応では、各学期に1回保護者会を開催して保護者との面談の機会を設けた。保護者との面談を通して親の願いや心配事を聞くことができるようになってきている。相談にのったり学校への提出書類などの手伝いをしたりすることもあり、保護者との信頼関係ができてきている。 スタッフに関しては、大学の授業の一環として大学生をスタッフとして一定期間受け入れた。また、これまでのスタッフも仕事の状況の変化などから、スタッフメンバーに多少の変動があったが、子どもの状況等の情報共有を密に行うことで、子どもへの支援はスムーズに行われた。今後、それぞれのスタッフが得意とすることを支援の中で生かして、支援内容の充実を図っていきたい。 学校との連携では、子どもが通う学校の先生が見学に来て学習を支援してくれるなど、学校とのつながりができてきた。
事業担当者(理事●)	<p>●篠原弘美 ●馬場貴司 ●福島聖子 ○角替弘規 (事業スタッフ) 内藤順子 保坂克洋 高島奈美恵 菅野由利香 井上哲夫 清島光 根岸佐織 横矢玄 相模女子大学ボランティアサークル「ミント」</p>
内容・日時・場所・参加者数	<p>〈毎週土曜日〉10:30～12:30 1/12 19 26 2/9 16 3/2 9 16 23 30 4/6 13 20 27 5/11 18 25 6/1 8 15 22 29 7/ 13 20 27 8/3 10 24 31 9/7 14 21 10/5 19 26 11/2 9 16 23 30 12/7 14 21 〈定期テスト対策～中学生対象〉16:00～18:00 5/15 16 10/2 11/14 〈中3受験対策学習会〉 12/26 27 場所：大和市立林間小学校 大和市ポラリス</p>

	大和市ベテルギウス 大和市保健福祉センター (のべ参加者数 小学生 212名 中学生 143名 スタッフ 357名 合計 712名)
収入金額	314,400 円 (県中央労福協共催金 250,000 円、歳末助け合い分配金 50,000 円、参加費 14,400 円)
支出金額	318,031 円 (給与手当 138,142 円、保険料 10,295 円、賃借料 81,250 円、諸謝金 33,408 円、印刷製本費 2,755 円、旅費交通費 4,000 円、消耗品費 48,071 円、雑費 110 円)

子ども支援事業 ⑧愛川学習支援 Friends☆Star 教室

<p>【2019 年事業目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2018 年度の事業の総括を行う。 ・地元の団体への引き継ぎを模索しつつ、難しい場合には 2019 年度の事業委託を継続する。 ・学習教室を、学習の場と居場所の両機能を持つ場として運営する。 ・子どもたちの社会的背景を洞察することができるスタッフの育成を目指す。 	
<p>【事業総括】</p> <p>2019 年 1～3 月は委託事業の地元への移行を視野にいれつつ、学校の学力に固執せず、子どもたちが安心して学べる環境づくりを基本とした。学習教室は 1 月 4 回、2 月 4 回、3 月 3 回、居場所づくりとして勉強合宿、広島修学旅行、卒業お祝い会&お別れ会を開催した。</p> <p>2019 年 3 月末には、無事に、委託事業を地元団体へと引継ぎを終えた。次団体への子どもたちのスムーズな移行を行うため、4 月はそれまで同様の学習教室を 3 回開催した。</p> <p>その後の子どもたちの不適應へのサポート体制として、ルーツを意識するためのスペイン語教室を開催し、ボランティアコーディネーターとして自身もスペイン語学習の必要性を認めている長畑ハルミ氏に委託した。5 月 15 日より隔週で開催されているスペイン語教室は、特に支援が必要とみられる三きょうだいに利用されており、複数文化と不安定な家庭状況のなかで生き抜く子どもの居場所として定着している。</p>	
事業担当者(理事●)	○清水睦美 ○角替弘規 ○清島光 ○武内敏子 スペイン語教室コーディネーター：長畑ハルミ
内容・日時・場所・参加者数	① 学習教室事業 2019 年 1 月 1 日～4 月 17 日 毎週水曜日 18:00～21:30 (14 回、ミーティング含む、委託期間 3 月 31 日まで) ② 居場所事業 勉強合宿 (2/2-2/3)、広島修学旅行 (3/11-14)、卒業お祝い会&お別れ会 (3/21) ③ スペイン語教室 2019 年 5 月 15 日～12 月 18 日 隔週水曜日 18:00～20:00 計 14 回開催 (のべ参加者数 267 名)
収入金額	639,554 円
支出金額	1,039,105 円 (給与手当 233,130 円、保険料 3,700 円、賃借料 82,820

	円、諸謝金 109,708 円、印刷製本費 3,020 円、旅費交通費 418,656 円、通信運搬費 120 円、消耗品費 91,834 円、会議費 72,717 円、雑費 23,400 円)
--	---

普及啓発事業 ⑨教育相談

【事業概要】

学校・教師・行政・子ども・保護者・外国人当事者・支援団体などの各種相談に応じる。内容によっては、必要なグループを立ち上げて相談に応じる。相談内容については、活動報告会で報告し、社会的に弱い立場にある者に、必要な支援のあり方を探っていくような場を設ける。

① 2018 年よりの継続相談 (1 件)

相談 1 (2016 年より継続) : エステレージャハッピー教室の教室運営・子ども対応などに関する相談を月 1 回行う。

② 2019 年より「すたんどばいみー基金」事業の移管を受け、外国人当事者の相談を受ける。(月 1 回程度)。

③ 2019 年より「保証人」事業の移管を受け、保証人対象の外国人当事者との面談を継続する (年 2 回程度)。

④ 教育相談事業として〈多言語若手通訳翻訳派遣事業〉を継続して行う。特にベトナム語の通訳不足に鑑み、その育成に重点をおくと同時に、大和市と共同事業提案を模索する。

【事業総括】

学校・教師・行政・子ども・保護者・外国人当事者・支援団体などの各種相談に応じることを目的とした本事業は、計画にある①～④に関わる事業に加えて、新規として⑤～⑦を行った。

① エステレージャハッピー教室の教室運営相談 (2016 年より継続) : 6 回の相談を行った。スタッフが充足されるようになり、個別のニーズに応じつつ教室として居場所づくりを目指す方向での相談を行った。

② 2019 年より「すたんどばいみー基金」から移管された件については、4 名 (G、T、S、E) に対して、月 1 回を基本として生活・返済状況の確認を行うと共に、当事者からの相談に応じることができた。

③ 2019 年より「保証人事業」から移管された件については、年 1 回の報告会で生活・返済状況を確認した。

④ 多言語若手通訳派遣事業に関しては、以下の通りである。

- ・登録者 9 名 (スペイン語 4 名、カンボジア語 2 名、ベトナム語 2 名、タガログ語 1 名) であった。登録に際して、研修会を行った。
- ・2019 年度に教育相談が仲介した通訳は 3 件 (依頼元 : 行政、高校、外国人母)、翻訳は 1 件 (団体内、フレンドスター教室) であった。なお、団体内事業であるエステレージャハッピー教室のスペイン語講師および通訳者に関しては、これまで

<p>の経緯に照らし、教育相談を介せずに行われている。同様に、フレンドスター教室のスペイン語の講師派遣も行われている。</p> <p>・ベトナム語通訳の育成のため、ベトナム語教室を4回開催した。</p> <p>⑤ 新規相談（外国籍母子）：外国籍母より夫のDVにより生活費等を工面できず、友人宅に逃げるもやはり生活費が工面できないという状況を受け、生活再建のための支援活動を行い、ある程度安定した生活が営めるようになりつつあるが、今後も断続的な相談活動が必要と考えられる。</p> <p>⑥ 新規相談（外国籍中学生・母子）：行政より不登校かつ自傷行為の傾向がある中学生に関する学習支援依頼があり、学習支援以前に行うべき支援があるのではないかと理解のもとに相談活動を実施。ここに至るまでの経緯が複雑、かつ、支援の失敗等も見られる事例で、相談・支援ともに難しい状況が続いている。今後も継続的な相談活動が必要と考えられる。</p> <p>⑦ 2019年度11月新たに「外国人の子ども理解のための事例研究会」を立ち上げ3回開催した。立ち上げ理由は、外国人の子どもの生きづらさが十分に理解されていない現状や、必要な知識を得たいという教員のニーズに応えるためである。来年度は学校支援事業の「外国人の子ども理解のための学習会」に引き継ぎ、参加費も集める予定である。</p>	
事業担当者(理事●)	●松永雅文 ○清水睦美 ○神戸芳子 ○篠原弘美 ○西岡歩
内容・日時・場所・参加者数	<p>① 4/20 6/8 7/6 9/7 11/2 12/14 計6回</p> <p>② 4名（担当者ごとに月1回、日時適宜）×12回 計48回</p> <p>③ 8/2 計1回</p> <p>④ 登録者9名、 研修：4/21 6/15 6/30 8/4 計4回 通訳派遣3回、翻訳1回 計4回 ベトナム語教室：8/4 9/1 12/1 12/22 計4回</p> <p>⑤ 会議：3/28 泉・戸塚区役所：3/29 9/6 きらきら星：9/8 12/22 家庭訪問：7/15 12/4 計7回</p> <p>⑥ 会議：7/1 8/2 9/25 学校：7/26 9/11 10/10 12/23 大和市家庭子ども相談：12/16 母面談：7/11 8/9 8/30 10/5 11/3 11/17 12/13 12/20 本人面談：7/11 8/16 8/20 8/27 9/2 10/7 10/15 11/7 11/17 11/19 11/26 12/2 12/3 12/9 12/17 12/24 計32回</p> <p>⑦ 11/2 11/20 12/14 計3回 場所：当法人事務所、当法人部室・大和市ベテルギウス会議室 大和市ポラリス、大和市渋谷学習センター</p>

収入金額	7,081 円（通訳謝礼）
支出金額	124,835 円（賃借料 3,650 円、諸謝金 111,363 円、旅費交通費 6,740 円、通信運搬費 82 円、雑費 3,000 円）

普及啓発事業 ⑩学校及び外国人支援に関する普及啓発事業

【事業総括】

2018 年度に引き続き、継続的な普及啓発事業を展開した。主たる事業の総括は以下のとおりである。

- ① 2019 年教育講演会は、ピアノ弾き語り音楽家・エッセイストの寺尾紗穂氏をお招きし、「原発労働と私たち・・・そして教育－知るべきこと 伝えるべきこと」をテーマとして開催した。
2020 年教育講演会のテーマは、2019 年に引き続き実行委員による話し合いに基づいて決定した。昨今の教育現場において徐々に注意を惹き付けつつある「ヤングケアラー」をメインのテーマとし、子どもでもありながら家族の介護に当たっている子どもたちへの教育のあり方について検討していくこととなった。実行委員内部で学習会を開催し講師との打ち合わせを行い、より充実した講演会となるよう準備に当たった。
また設立 15 周年記念事業としてそれまでの教育講演会 15 回分をまとめた記念冊子を作成する方向で検討を進めた。
- ② 広報誌「Ed.ベンだより」を予定どおり No.29～34 の計 6 号を発行した。
- ③ ホームページは各事業内容の進行に合わせて随時更新を継続した。アクセス数は 3195（19222c-16027c）で前年比 1254 減となった。アクセス数が増加するよう、今後も見やすいページ作りを念頭に更新を継続したい。
- ④ 2019 年度版のパンフレットとして、従来からのデザインを一新し、三つ折版パンフレットを作成・配布した。
- ⑤ 資料・書籍の管理販売として、教育講演会での書籍販売を行った他、教育講演会終了後、これまで事務局が保管していた在庫分の書籍を部室に移動し、200 円にての販売を開始した。
- ⑥ 他機関・他団体との関係に関しては、年末たすけあい配分金への応募のみを行い、配分金を受領した。受領した配分金は外国人子ども支援事業に充当した。
- ⑦ 研究者対応として研究調査依頼が一件あったものの具体的な調査実施には至らなかった。また研究者からではない外部からの問い合わせがあり、普及啓発として対応した。今後も同様のことが生じることが想定されるため、来年度以降、「渉外（研究者対応を含む）」という項目に改めて対応したい。
- ⑧ 会員に対してはメール配信と郵送による情報提供を継続している。広報誌や事業について迅速な情報提供ができるよう努めた。

事業担当者（理事●） ●角替弘規 ○前田拓郎 ○池田喬 ○清水睦美

内容・日時・場所・参加者数	<p>① 【2019年教育講演会】 2019年2月23日(日)13時30分～17時00分 場所：大和市渋谷学習センター多目的ホール 参加者：36名（懇親会14名）</p> <p>【2020年教育講演会】 7月25日（木）学習会（於：大和市シリウス）</p> <p>① 9月19日（木）テーマ検討会（於：事務所） ② 10月29日（火）講師との打合せ（於：吉祥寺） ③ 11月12日（火）講演会構成検討（於：事務所） ④ 12月23日（月）パネルディスカッション検討 ① （於：大和市ベテルギウス）</p> <p>② 大和市を中心に教育関係・国際関係団体に配布(2000部/回) ③ 随時（担当者打合せを月1回開催） ④ 2019年度パンフレット 4月配布(2500部) ⑤ 29冊（14,480円（『原発労働者』820円×14冊、過去書籍200円×15冊） ⑥ 年末助け合い配分金。金額50,000円。 ⑦ 2件（うち、研究者対応1件、普及啓発対応1件）。 ⑧ なし</p>
収入金額	86,891円（参加費）
支出金額	370,810円（賃借料17,400円、諸謝金71,137円、印刷製本費103,442円、通信運搬費96,741円、会議費14,655円、業務委託費27,000円、消耗品費38,491円、雑費1,944円）

⑪法人の事業円滑実施のための活動

<p>【2019年事業目標】 事業を円滑に実施するために活動する。</p>
<p>【事業概要】</p> <p>① 総会・活動報告会・事務所管理等の事務 ② 会計 ③ 東日本大震災・反原発関連活動</p>
<p>【事業総括】 担当者の変更に伴い、活動の効率化と業務内容の精選化を図った。</p> <p>① 2019年度総会を2019年2月23日（土）11:00～12:00開催。参加者73名。 活動報告会を年8回開催し、報告・審議を行った。 事務局会議を年13回開催し、事務所管理・事務局運営を行った。 年間計画を作成し、活動の全体予定を把握できるようにした。</p> <p>② 年3回の会計締日を設定し、予算の執行状況を把握した。</p> <p>③ 2019年教育講演会は、原発労働をめぐる題材を取りあげたので、講師選定やパネル</p>

<p>ディスカッションに関わり、これまでの支援活動などの話題提供を行った。 震災支援の子どもたちのその後については、断続的に情報をえるように心がけており、必要のある場合には個別支援を継続している。</p>	
事業担当者（理事●）	<p>事務局体制</p> <p>① 事務一般：●神戸芳子 ○池田喬 ○清水睦美 ○篠原弘美 ○武内敏子 ○内藤順子</p> <p>② 会計：○篠原弘美 ○清水睦美 ○神戸芳子 ○小西永里子</p> <p>③ 東日本大震災・反原発関連：清水睦美</p> <p>法人規模 ・活動報告会：理事 17 名 ・総会：正会員 95 名</p>
内容・日時・場所・参加者数	<p>① 事務局会議：月 1 回（年間 13 回） 原則木曜日 19:00～20:00 当法人部室・事務所 活動報告会：8 回（原則隔月）大和市ベテルギウス 総会：2019 年 2 月 23 日（土）参加者 73 名 渋谷学習センター多目的ホール</p> <p>② 会計確認：3 回（1 月 6 月 10 月）当法人事務所</p>
収入金額	888,507 円（会費 701,500 円、寄付 151,000 円、雑収入 36,007 円）
支出金額	346,234 円（通信運搬費 135,116 円、消耗品費 37,149 円、印刷製本費 12,330 円、水道光熱費 38,419 円、賃借料 5,800 円、租税公課 20,250 円、保険料 3,570 円、諸会費 6,000 円、雑費 87,600 円）